

[基調講演&ワークショップ]

人工知能時代の言語能力評価を考える —運用能力の評価を中心に—

李在鎬（早稲田大学）

【基調講演】 コロナショックにより、急激なデジタル化が進み、社会活動の多くが仮想空間上で展開されるようになりました。こうした変化は、日本語学習者における教育環境にも大きな変化をもたらしました。本講演では、こうした近年の ICT の進化および人工知能の躍進によって、語学の学習環境がどのように変化したのかについて考えます。そして、こうした変化を受け入れた上で、今後の教育活動を考える上で、私たち日本語教師は、どのような姿勢でのぞむべきかについても私の考えを述べたいと思います。特に、言語能力の評価に注目しながら、以下の4点の話題を取り上げます。

1. ICTの進化がもたらす学習環境の変化とその影響
2. 言語能力評価に関する多様な見方
3. 現代的な言語能力評価：四技能から七技能へ
4. コンピュータを用いた言語運用能力の評価

【ワークショップ】 基調講演のコンピュータを用いた言語運用能力の評価について具体例を交えながら紹介します。具体的なシステムとして、講演者の研究グループで開発した <https://jreadability.net/> を取り上げます。ワークショップでは、このシステムを使って、人間の評価と機械の評価を比較する2つのタスクを行います。1つ目は文章の読みやすさを評価するタスク、2つ目は日本語学習者が書いた作文の熟達度を評価するタスクを行います。この2つのタスクを通して、機械による評価の可能性と課題を参加者自身が把握することを最終目標にしたいと思います。

最後に、講演とワークショップを通して、以下の3点のメッセージを伝えたいと考えています。

1. 教師の立ち位置について：コンテンツ作成者から案内者に変化しつつある。
2. コンピュータと人間の共生について：点をつける評価はコンピュータに任せ、能力をつける評価を人間が担う。
3. 社会の変化について：テクノロジーの進化により、手法が変わることはあっても本質は変わらない。ツールに振り回されない自己を作る。